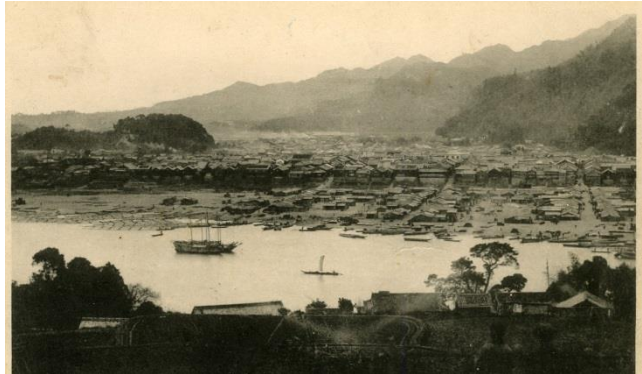


消える??幻の川原町?!

レポートも熊野川河口までたどりついた。

当時熊野川河口近くの権現川原には、川原家とよばれる 8 畳ほどの簡易な建物が立ち並んでいた。最盛期の明治末期から大正初期には 300 軒近く、大正中期から昭和初期でも 120~30 軒ほどの店があったという。その種類も宿屋、鍛冶屋、飲食店、みやげ物屋、魚屋、履物屋、米屋、たばこ屋、酒屋、風呂屋など様々だった。

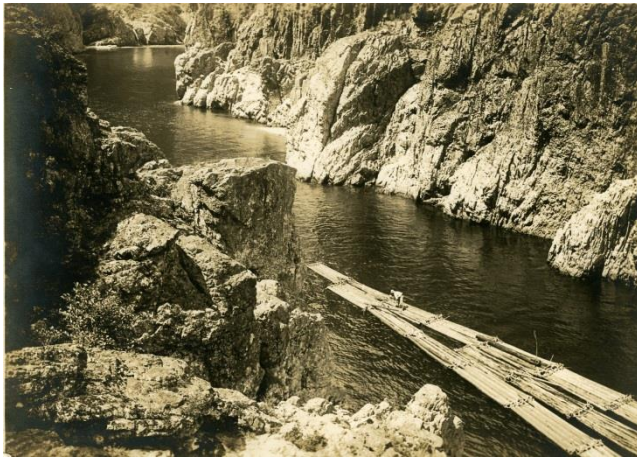


当時の川原町の様子

「川原よい処 三年三月 出水さえ無きや 倉が建つ」と新宮節の一節にうたわれていることから、川原町での商売が活気に溢れている場面が容易に想像できる。

しかし水が出ると流失の危険がある川原へ、多くの店が並ぶことは全国でも珍しく、このような場所に「町」ができたのはなぜだろうか。

ひとつには筏流しや三反帆と呼ばれる生活物資を運ぶ小舟がすべてこの川原に到着し、



関東・東北方面から来る巡礼や熊野三山参詣者、近在の三重県側の人々も成川の渡しを利用したため、多くのひとが権現川原へ集まったことがあげられる。

またもうひとつには、川原家の特徴があげられる。この特徴ゆえに川原町は幻の町ともいわれ、「大水がでるぞ」といわれれば、30分で町が消えたという。

当時の筏流しの様子

そもそも川原家とは何か。

その建物の各材をすべてはめ込み式にしている、釘を 1 本も使っていない建物で短時間で容易に解体、建設でき、解体時の材木もまとめて高所に運ぶことが可能なもので、全国でここだけにしかなかった。史料によると奈良時代末期からあったようだが町をつくるほどになったのは江戸時代初期頃からといわれている。

年に 5~6 回ある不時の洪水の際には、短時間で解体。その木材を川原をあがって道に

置き、人は本来の居住地である「あがりや」ですごした。あつというまに川原には何もなくなるのだ。水が引けば5時間ほどでまちが再現したらしい。

しかし昭和10年以降交通・輸送路が熊野川から大きく変更される。

昭和10年熊野大橋が開通。

昭和14年新宮～本宮間の川丈バスが営業を開始。

昭和19年プロペラ船発着場が新宮川原から宮井に移行。新宮～宮井間がバス連絡になる。

川原町も衰退していき、戦後の昭和25年、最後の1軒（鍛冶屋）が閉じて、約300年間続いた川原町が完全に消滅した。

出典 新宮市ホームページ <http://www.city.shingu.lg.jp/>

川原町の話は聞いていて面白い。

当時を知る人によると、川原町は林業に携わる旦那衆が遊ぶ船町に接しており、早朝・夜間と音を気にせず長時間作業が可能であったため鍛冶屋などが多かったという。旦那衆も気前がよく、洪水時には解体した川原家の材木は自分の所有する船町付近の敷地に置かせてやり、また木材を運んできた筏師に木材の何本かは小遣いとして渡していたようだ。

木材を運んだあとの船には土産物などが大量に積まれていたが、一晩置いておいても盗まれることはなかったという。道徳教育もきちんといきわたっていたのではないかという話だ。

当時の筏師の豪遊とはどんなものだったのか。以前のレポートでも触れていたが、木材の集積地として栄えていた新宮市には大王地に花街があり、芸者も昭和30～45年の繁栄時には100人ほどいた時もあったという。今でも新宮市には元芸者さんがおり、そこでは「新宮節」や「瀬小唄」など、紙でしか見たことのない歌の音を直接聞くことができる。とても貴重な体験だ。当時の筏師の話もきけるかもしれない。

ウェブサイト「新宮人」でも紹介しているので、ぜひ楽しい話を聞きに会いに行ってみよう。

<http://communitytravel.jp/shingu/archives/163>

現在熊野速玉大社隣に川原家を再現した横丁がある。建物自体は釘を使わない本物の川原家ではないが、当時の雰囲気味わうことができる。

(中瀆裕美子)

